

# 第15回 ダイワハウスコンペティション 作品募集

愛という言葉にどんなイメージをもつでしょうか。愛は、特定の誰かへ向ける愛だけでなく、とても多義的な広い意味をもちます。身近な暮らしの中から見つかる愛もあれば、世界や地球規模までスケールを拡げてとらえる愛もあるでしょう。また、偏った愛でも、それを突き詰めると、何か大きな可能性に繋がるかもしれません。

反対に、効率や機能、綺麗事のような正しさだけでは愛は生まれません。紆余曲折を経ることも愛を考えるうえで重要なプロセスといえます。では、そのような愛を考えたい時、家はどのようになるでしょうか。自分と他者との関係を深く追求し、愛を核に、そこに住まう意欲が強く現れる家を具体的に考えてください。

敷地は架空でもリアルでも自由です。戸建て1棟、戸建ての集合、併用住宅、リノベーションなど、形式やプログラムは問いませんが、ひとつの家として必要な空間を提案してください。「愛」をどういうものとしてとらえたかをしっかりと定義して、家の根本に立ち返り、それぞれの愛からこれからの時代の家考えた案を期待します。

# テーマ 愛の家

## 【審査委員】 審査委員長

**青木 淳** 建築家 青木淳建築計画事務所  
東京藝術大学教授

## 審査委員

**堀部 安嗣** 建築家 堀部安嗣建築設計事務所  
京都造形芸術大学大学院教授

**平田 晃久** 建築家 平田晃久建築設計事務所  
京都大学教授

**小堀 哲夫** 建築家 小堀哲夫建築設計事務所

**南川 陽信** 大和ハウス工業 上席執行役員

## 【賞金】

**最優秀賞** (1点) **200万円** および記念品

**優秀賞** (2点) **各30万円** および記念品

**入選** (4点) **各10万円** および記念品

(以上、1次審査通過7作品)

**大和ハウス工業賞** (1点) **30万円** および記念品

**佳作** (10点) **各5万円**

※すべて税込み

※大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれたので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。  
※2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金額の配分を変える場合があります。

大和ハウス工業株式会社

東京都千代田区飯田橋三丁目13番1号 〒102-8112  
Tel 03-5214-2181 Fax 03-5214-2296

www.daiwahouse.co.jp

登録・提出締切:

**2019年9月25日(水) 消印有効**

<https://www.daiwahouse.co.jp/compe/>

主催：大和ハウス工業株式会社 後援：株式会社新建築社

## 「愛の家」を考える



座談会風景。左から、南川氏、小堀氏、堀部氏、青木氏、平田氏。

### 「見えないもの」を考える

**南川** 今回で、ダイワハウスコンペティションは第15回を迎えます。前回の第14回の課題「太っ腹な家」では、度量が大きく大胆で心の広いことを住まいで体現する家を募集し、ユニークな提案が集まりました。今回も、「住宅」を課題の土台として、前回に引き続き内容を深めていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

**司会** 今回は各審査員に事前にテーマ会議の下地となるアイデアを用意して頂きました(下註)。このアイデアを土台に、ご意見をお聞かせください。

**南川** 「愛の家」「夢のある家」「未来の家」は繋がりますね。「仕事のある家」「食べられる家」は家の特化した部分や社会全体の大きな枠組みでとらえることだと思うので、多様な案が出てきそうです。

**青木** このコンペがほかのアイデアコンペと違うのは、2次審査で具体的な空間のイメージが出てくることだと思います。アイデアコンペは一発アイデアで賞を取れることが多いのですが、前回の最優秀作品「太まち—まちのよ

### 各審査員に事前に提出していただいた草案

**青木淳**

「仕事のある家」=在宅勤務など仕事のあり方が変化してきている中で、仕事と家の関係はどのように考えられるか。

「愛の家」=愛のある家とは何か。住宅の根本に立ち返って愛から家を考える。

「骨太な家」=骨太はいい意味でも悪い意味でも使われる。どう骨太をとらえるか。

**堀部安嗣**

「未来の家」=未来予想において人は子供の時のイメージに囚われる。現在の若者がどんなイメージに未来を感じるのか。社会課題など日本の厳しい現実を考える必要もある。

**平田晃久**

「夢のある家(夢に住まう、夢の中の家)」=それぞれの幸せのあり方が変わって

座談会参加者

**青木 淳** (建築家 青木淳建築計画事務所  
東京藝術大学教授)

**堀部安嗣** (建築家 堀部安嗣建築設計事務所  
京都造形芸術大学大学院教授)

**平田晃久** (建築家 平田晃久建築設計事務所  
京都大学教授)

**小堀哲夫** (建築家 小堀哲夫建築設計事務所)

**南川陽信** (大和ハウス工業 上席執行役員)

うな家」も、最初は一発芸だと思っていましたが、模型が出てきて高評価を得た。つまり単なるグラフィックやアイデアだけで終わらない、具体的な空間まで考えられている提案が集まるテーマがよいと思います。アイデアのひとつとして提示した「仕事のある家」はそのきっかけになるのではないかと考えました。

**小堀** 確かにこれからの時代、家にとって仕事というテーマは大事になってくると思います。最近ではオフィスがいらなくなって、ほとんど家で仕事しているような人たちもいて、家とは何なのかという議論が出始めています。それと同時にオフィスにキッチンがあり、家具も傷のつきにくいものでなく、木製になっていたりオフィスが家化しています。これからの時代はオフィスと家が逆転する可能性さえあります。

**堀部** これまでのコンペで、最優秀にはならないけど、審査員の興味を引いたものの中に、アイロニカルなディストピア的な提案がいくつかありました。それに反応してしまう経験があったので、「未来の家」というテーマはむしろディストピアを描いてもいいぞ、という期待を込めて考えました。「愛の家」「夢

きた現代において、古くから存在するテーマ「夢」を改めて考える。「耳を澄ます家(敏感な家、五感を使う家)」=普段は見落としてしまう人間の感覚について考えることで、社会問題以前の根元的な空間のあり方を考える。「べらぼうな家」=驚きがある家。すごいということを深く考えてみる。

**小堀哲夫**

「食べられる家」=食は人同士の信頼関係を紡ぐきっかけになる。現代の孤食などの問題に対して、食を通したコミュニケーションのかたちを考える。「椅子の家」=椅子があるだけで公共性が生まれる。家自体が公共性をもつためには何かが必要か考える。

「座敷童(妖怪)が居る家」=古い家には空間のオーラや時間性が染み付いている。おばけや妖怪がいそうな、その雰囲気がよい空間となっている場合がある。新しい家でそれをどう実現するか。

「空と地中の家」=空はどこまでが自分のものなのか。地下はどこまでが自分のものなのか。住宅の所有権のあり方を考える。

のある家」もディストピアを描きやすくするテーマですね。ジョージ・オーウェルの『1984』みたいにディストピアを描くことで、こうなつてはいけないという逆説的なメッセージが生まれる奥行きのある提案が出てくることを期待しています。

平田 「妖怪」というテーマは面白いと思うのですが、少しとっつきにくい感じがします。そこがクリアできたらいろいろな想像ができると思うのですが。

堀部 具体的な手法を想像するのが難しいですね(笑)。

青木 ローマ神話には、ゲニウス・ロキという考え方がありました。土地は空白ではなく、そもそもそこには精霊が住んでいて、その上に家を建てるといふ考え方なのですが、建築では古くからあるテーマで、改めてそれを妖怪に置き換えて考えるのも面白いかもかもしれません。

小堀 妖怪は目に見えないものです。そういう意味では「耳を澄ます家」も面白いと思いました。目に見えない何かが家の中にたくさんあって、建築を設計する時それをどうとらえるか考えてみると面白そうです。

堀部 さまざまな社会問題など厳しい現実があるので、綺麗ごとばかりで提案していてもダメだと思います。善と悪、のような相反するものを許容する寛容なテーマがよいですね。ユートピアを描ける人はユートピアを描けばいいし、ディストピアを描きたい人はディストピアを描けばいい。

青木 確かに日本が抱えている悪いところや社会的な問題を意識するのも大事ですが、逆にそれは気軽に扱える問題ではないと思います。ある意味



建築だけで解決できる問題ではないので、だからこそ、建築をちゃんと考えないといけないと感じます。ディストピアはどんなコンペでもある程度数は出てきますが、イラストレーションで終わってしまいます。世界への警告にはなるけど、解決には繋がらない、アイデアだけになってしまう可能性があります。だからこそ、言葉が重要です。愛とか夢とか未来はそのことを考えるきっかけになるのではないかなと思います。

堀部 ファンタジーでもフィクションでもいいよ、と投げかけておいて、公開審査の時に審査員が結局それはファンタジーだと否定してしまうことは避けたいです。ファンタジーやフィクションを考え抜くと突き抜けて現実に繋がると思うので、そういうことを考えるなら徹底的に現実を見てもらうのもいいかなと思います。

## 未来か、愛か

小堀 前回の最優秀作品を見て、ある種の突拍子のなさをもつ案が出て来やすい言葉がテーマには大事なのだと思いました。応募の年齢層も幅広いので、応募者が普段考えていないようなテーマに新しい案が出てくる可能性があるのではないかと感じました。

南川 前回の最優秀作品の作者は海外の方で、「太っ腹な家」の太いに反応して案をつくったそうです。太っ腹が強い言葉で、誰でも反応しやすい言葉だったのがよかったのだと思います。

小堀 太っ腹が面白いのは、思いつきでは答えが見えてこないことですね。

平田 やはり言葉の問題は大きいですね。言葉のインパクトをどう考えるか。

青木 それぞれのテーマに「今の」を入れると全然意味が変わって、現実が起点になります。考える射程が増えるかもしれません。

堀部 確かに「未来の家」だけだったら今提案されるどんな案も未来の家になりますね。

南川 「今の未来の家」と今がつくだけでわかりやすくなりますね。応募者の年齢によってどこまでを未来と考えていいか大分異なります。

司会 愛を考えるか、未来を考えるか。

小堀 小学校で、よく未来の都市を描きますよね。あれはあれで楽しいのですが、イメージがつきすぎていて固定化してしまう傾向もあるかもしれません。

平田 僕らの子供の頃に考えられた未来という定型があつて、それを超えるとなると難しい。愛は、素直な人も素直じゃない人も反応できる自由な言葉かもしれません。

南川 確かに愛は広いですね。一方、未来はイメージのしやすさが特徴ですね。

小堀 愛と言ってしまふと普遍的な言葉すぎて難しくならないでしょうか。一方で、「今の未来」という言葉はフックになりやすそうです。僕らの年代が考えるものと違う未来のイメージが出てきたらいいのですが。

平田 誤読を誘う修飾語がついたらより多様な案が出てきそうですね。

青木 愛という言葉自体が誤読を誘う広さをもっている気がします。未来の方が狭いように思います。

## 多義性を見出すものとしての「愛」

青木 機能的なことよりも、どうしても住みたい、と住む人の意識や欲望がある家でないと「愛の家」にならないのではないかと思います。人間としてそこに住まう強さが出てくるのが「愛の家」だと思います。

堀部 「〇〇を愛する家」だと何かが好きな家に繋がりますが、「愛の家」とはニュアンスが違いますね。案外シンプルなものになるかもしれません。

南川 「愛の家」は、今自分が住んでいる家が不自由で大変でもそこに強さを見出す。そういうとらえ方はよいですね。

青木 不自由な家だけど、本質的に個人の思いが強く現れている家ですね。

小堀 愛はいろいろな言葉がありますが、大きい意味でとらえてほしいですね。

司会 愛のある家、愛する家とするととらえ方が変わるかもしれません。

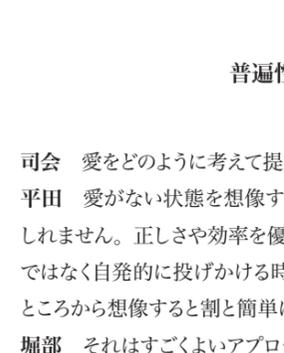


青木 ただ、動詞より名詞にした方が、言葉を定義しなければならないから広がりが出るのではないかと思います。何を愛と考えるか。その人がどう愛をとらえたかが重要です。去年も太っ腹をどうとらえたかで提案のバリエーションが生まれていたと思います。

平田 誰かが誰かを愛するということが、もっと抽象度の高いことを全部含んでいて、それが動詞になって行為になった瞬間、陳腐化する気がします。名詞に留めておいた方が広がりがあるのではないのでしょうか。

青木 名詞の状態ならばキリスト教のような愛もあれば、仏教の愛別離苦のような言葉にもとらえられる。とらえ方がさまざまになるのが面白いですね。

司会 では、今回は「愛の家」をテーマとして設定したいと思います。



## 普遍性をどう見出すか

司会 愛をどのように考えて提案したらよいのでしょうか。

平田 愛がない状態を想像すると、愛がある状態を想像しやすくなるかもしれません。正しさや効率を優先すると愛がなくなる。何か目的があるわけではなく自発的に投げかける時に愛は発生するのもかもしれません。身近なところから想像すると割と簡単に見つかるかもしれない。

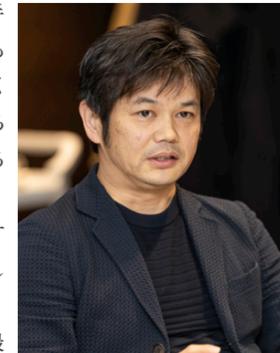
堀部 それはすごくよいアプローチですね。また、建築を考えるうえで愛を注げるのは、家族、近隣もある街もあります。あるいは風土でもいいし、趣味でもいい。

南川 もっとスケールを大きく地球環境や私たち自身などとらえ方もいろいろとあるような気がします。

小堀 以前、おにぎりを食べた時に素手で握ったものとビニールを使って握ったものの両方を食べて、素手の方が美味しく感じました、その時なぜそう感じるのだろうかと思いましたが、これも愛が関係するのかもしれません。

堀部 ある正しさではないということですね。矛盾を孕んでいる場合もあるかもしれません。

小堀 愛は選択なのかもしれません。最近世の中のスピードが速くて何でもかんでもやらなければなりません。その時に、何かを選択するきっかけとして、愛しているから選択するみたいなのもありますよね。最近スローフードの研究をしていて、スローフードを守るためにはいろいろなものを捨てていくことを知りました。つまり何かひとつを決めて他を削ぎ落としていくことも愛が関わっているのではないのでしょうか。



青木 愛のないものという反対のものを想像してもいいですね。愛のないものは功利的だったり目的がはっきりしていて最小限の努力で達成されるもので、それがどう表現されるのか。

堀部 綺麗ごとで終わらない、そういう表現が出やすい状況にしたいですね。

青木 無条件の愛は英語でunconditional love、つまりconditionと相反するところにあります。僕たちは普通、世の中がこうなるならこうする、こういう状況だったらこうするというように、conditionalに設計を行います。そうした普通に生きていて必要とすることと違うものが何なのかを知りたいですね。だからこそ、愛をどういうものとしてとらえたかをしっかりと定義することが大事になると思います。

小堀 いろいろな愛が出てくる可能性があり、普遍的で広がりがあるので、このテーマを選んだ以上、どんな定義も否定できませんよね。

## いかに自分を壊すか

平田 真木悠介さんの本に、愛というものは生物の歴史の中で自分の中に他者を取り入れることで自分が半ば壊れるという事であり、そのことにより生命はより高次な存在に進化してきた、と書かれていました。そのくらいのレベルで愛をとらえた提案があると面白いですね。

小堀 他者という存在をもたないと、自己中心の愛に終わってしまう可能性があります。私たちがいろいろな人と建築をつくる中でも、他者をどれだけ受け入れる愛があるかででき上がるものも違ってきます。日本人は村社会で自分の身近な人びとは守りますが、他人のことは気にかけないところがあるので、受け入れることに関して後進国かもしれません。愛はそれをさらに超えている気がします。

南川 思いもよらない発想に期待したいですね。

平田 特定の趣味にもすごく没頭した先に人類愛に繋がるかもしれないし、とにかく没入してほしいですね。

堀部 個人の愛でもいいですね。偏愛も面白そうです。

平田 ある卒業設計で、おじいさんの記憶を宿す空間をつくった人がいました。そのおじいさんは長崎の原爆を体験した人で、その提案では原爆を抽象的に扱うのではなく、おじいさんの個人的経験の中で扱っていき、それがひとつの普遍性に繋がっていくことが試みられていました。客観性ではなく主観性を突き詰める方法もありえますね。

(2019年4月10日大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)

